



あなたにぴったりの湿地は

クッチャロ湖



こんなところ ↓

クッチャロ湖



千田 幹太 (クッチャロ湖水鳥観察館)



クッチャロ湖全景

日本最北のラムサール条約湿地クッチャロ湖。周囲 30 km、面積 13.30 km²、平均水深 1.5 m のこの湖は、大沼・小沼と呼ばれる2つの湖からなり、5,500 万年前に海が閉ざされることでできた海跡湖である。大昔から海との繋がりがあからなから、海水が流れこんでいる汽水湖であるため、舐めるとしょっぱい。そして、クッチャロ湖といえはなんといってもハクチョウだろう。春と秋の渡り鳥のシーズンには多くの水鳥の憩いの場として利用されているが、なかでも国内有数のコハクチョウ(→p.26)の飛来地として知られている。10月初旬に初飛来し、5月のゴールデンウィーク終わりまで長期滞在する。クッチャロ湖は日本最北のラムサール条約湿地であると同時に、6,000羽を超えるコハクチョウを受け入れる最北の巨大リゾートホテルという顔を持っているのだ。

自然の恵み豊かなクッチャロ湖の四季はそれぞれに異なった楽しみ方があるが、白鳥の湖を紹介するには、まず秋からシーズンが始まることを覚えてほしい。秋にロシア極東部をはじめとした高緯度地域からハクチョウやカモが渡ってくる。冬は日本各地で過ごし、春になると繁殖のため再び北へ北へと渡っていく。4月にハクチョウ飛来数がピークを迎えるのは、日本で最後の中継地として多くのハクチョウが羽根を休めるためである。そして、オフシーズンである夏が過ぎるとまた新たなシーズンが始まる。クッチャロ湖の1年もハクチョウに合わせて秋から紹介していきたい。



クッチャロ湖畔



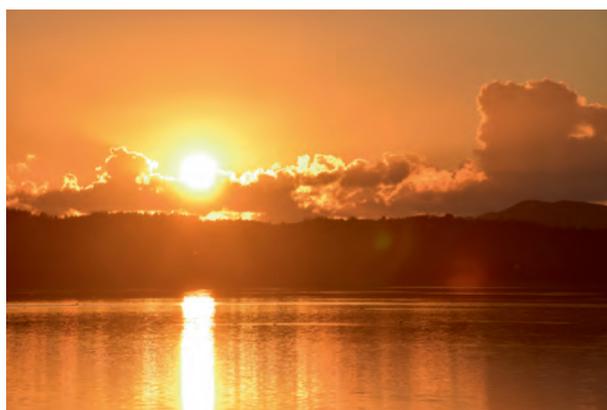
4月のクッチャロ湖

秋、ロシア極東部で繁殖したハクチョウが、子どもを連れて越冬のためにクッチャロ湖に舞い降りる。カモたちはもう少し前に飛来しているが、この時期の水鳥は越冬を目的としているため長居はしない。ビジネスホテルのような利用の仕方である。秋も終わりに近づく頃にはオオワシ・オジロワシ（→p.31）が渡ってくる。翼を広げると2mを超える雄大な姿は鳥肌が立つほど感動するに違いない。冬、湖面が凍りつき長い眠りにつく。しかし、200～300羽のハクチョウは寒さに負けずに越冬している。凍りついた湖が少しずつ解け始める春、雪解けとともにハクチョウやカモが北上してくる。解けた湖面には大きな氷の塊ができ、それが風の力で動き回る。1日の内に何度も氷の形が変わっていく中で、水鳥もそれに合わせるようにあちこちで群れが動き、飛び立ち、鳴いている。また、真夜中でもハクチョウたちの歌声は止まることはなく、風物詩となっている。

水鳥の姿が見えなくなった夏は、人間が白鳥の湖を楽しむことを許された貴重な時間である。カヌーやウインドサーフィンなどのアクティビティを楽しみ、湖畔ではキャンプをしながら穏やかで豊かな自然を満喫する。ハクチョウの気持ちになってクッチャロ湖にどっぷり浸れる最高の季節である。



クッチャロ湖で繁殖しているオジロワシ



夕焼け

手つかずの自然と人間が尊重しあい共存しているクッチャロ湖。水鳥の渡りの中継地としてとても大切な役割を果たしているが、周辺の湿地ではタンチョウも繁殖をしている。多種多様な鳥の生活を支えている、まさに野鳥の楽園である。



高層湿原